

和歌：文苑

著者	杉山，富槌，宇野，哲人，石橋，愛太郎，中内，義一，子軒生，やまひと，江津子，哲人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 0
ページ	6 0 - 6 1
発行年	1896-11-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/4642

熊本なる第五高等學校の開校紀念のつとひに

寄するとしてよめる

在文科大學

杉山富樫

年毎にまける小松をためしにて學のその榮えゆくみる

思ひたち立田のつとひゆかまほし分ちかねたる身にしあれども

紀念會を祝して

宇野哲人

龍田山峰の松風けふきけは千代もと祝ふ心地こそすれ

全

石橋愛太郎

常盤なる松の緑にたくふへし我學ひやの千代の榮えは

指折りて六とせ七とせ數ふ間にやかて千とせの祝こそせめ

寄松祝

中内義一

大君の惠の露のまけられはいよ榮えん園の小松は

紅葉

子軒生

夕きりに山路わけ入る武士の鎧の袖にちる紅葉かな

風

隼鷹はいつち行けむ荒寺の軒端をすくる木枯の聲

都の友に

やまひと

秋なれば千草の花の咲きぬらむ香をたにねくれむさしの友

泉

足曳のみ山の泉夕されは月より外に訪ふものもなし

扇

忠と義をやかて扇の要にて日毎にあふけ君か御稜威を

竹

碓川の岸の弱竹なよくと世のうきふしをみすにくらすか

庭菊

江津子

あれはてよさひしき賤か庭の面に千代をかさせる白菊の花

秋風

露はるふ野路のしの原音たてよ夢をとろかす夜半の秋風

月あかき夜鶉のなくをきよて

哲人

なきもまたさやけき月にうかれけんねくらはなれて鶉のなく

角笛

柳影

大空きよく雲たかく

けさより霧もたちぬれば

峰の松風音かはり

浮世の秋はかへり來ぬ

山もと近き牧の野は

桐の一葉の落ちてより

夜毎にすたぐ鈴虫の

こゑもかれ野となりけり